

7 雨宮凹地から見た土口將軍塚古墳

1

古代、善光寺平南半の雨宮凹地には1世紀半余に及ぶ世襲王権が存続していたとする推測がある。森將軍塚・倉科將軍塚・土口將軍塚・有明將軍塚古墳など、ここに蟠集している前方後円墳から説かれたことで、昭和33年発表の、ここを国造治処と見た斎藤忠氏の考察⁽¹⁾あたりが皮切りになるだろうか。30年代には屋代城の内遺跡や屋代条里水田の調査があり、40年には森將軍塚古墳の第一次調査、関連して倉科や土口將軍塚古墳の墳形測量が行なわれ、45年には考古学よりする本格的な地域研究の嚆矢となった岩崎卓也氏の「古墳時代の遺跡・遺物と郷土社会の変貌」⁽²⁾が発表されている。

その後、更埴市教育委員会による発掘調査、更埴郡誌の発刊、5次に亘る森將軍塚古墳の保存整備事業に係る調査でこの地域の考古学的な解明は急速に進んだ。そして、この度の、長野・更埴市両教育委員会による土口將軍塚古墳の調査で一応の小括を迎えた。

2

冒頭の推測は4基の前方後円墳の規模・形状・施設から森將軍塚・倉科將軍塚・土口將軍塚・有明山將軍塚古墳へと続く編年に基づいているが、岩崎氏の45年レポートは、その推測を一応は是認しながらも、これにはなお考究を重ねねばならぬ幾多の点のあることを指摘している。その中には土口將軍塚古墳に係る問題もある。

氏は、1世代1古墳で4基の首長墓を縦位置に並べる1説の他に、

2説、森將軍塚—倉科將軍塚—有明山將軍塚
└─土口將軍塚

3説、
森將軍塚—有明山將軍塚
└─倉科將軍塚
└─土口將軍塚

4説、森將軍塚—倉科將軍塚—有明山將軍塚
└─土口將軍塚

という、3種類の配列を掲げた。このうち、初代首長が終ると3人の支配者が鼎立する3説は成立し難いだろうが、2説・4説の配列は有り得ることだと発言している。

そして、その場合、土口將軍塚古墳がキー・ストーンになっている。

「直接この地域の平地(雨宮凹地)を俯瞰する位置にはなく、地理的に若干の問題をとどめている。すなわち、北方、千曲川の流域を眺望するに由り薬師山の尾根を修飾して築造され」という立地の点から、2説の場合は、「3代目に北方の低地をのぞむ地帯の首長が新たに強力な権力を持つに至り、2首長に分割支配されるとみるか、両古墳の規模の相違からみて支配機構の整備されたある種のすがたを想定することもできよう」。4説の場合では、「土口將軍塚古墳の被葬者の基盤となった土地・集団は、もともと森將軍塚古墳のそれとは別個のもので、むしろ、この地域の2代目首長の段階で大和政権の傘下に入ったとみるべきであろう。」

2説・4説の推測は、単系世襲王権の存在を否定することになり、かかる考察の経緯があって、森・

倉科・土口の3基の將軍塚古墳の周囲、及び、その山麓に形成されている後期の群集墳の存在から、この地域には幾つかの集団が居り、その集団の形成年次を溯ぼらせた場合、「森・倉科・土口の3將軍塚古墳の被葬者は、それぞれ別個の集団の族長だったと考えることも許されるだろう。もし、この考えが認められるなら、首長権はある特定集団内の特定親族に世襲されたのではなく、有力集団(或いは全集団)の間を移動していたと推測できる」こととなり、1説の立場をとっても、「利害をともにする幾つかの農業集団のルーズな連合体がこの地域の古墳時代前期の社会の実体だった」との結論を生み出している。

この結論は、6世紀後半以降の150年以上に亘り継続的に作られてきた森將軍塚古墳の墳麓を囲繞している小形埋葬施設⁽³⁾の存在で証明されている。もし、森將軍塚古墳から始まる単系世襲王権説に固執していたならば、小形埋葬施設群の説明はつき難い。

3

この問題について、別な観点からの推測はできないものだろうか。

この後、科野国造の入信、7世紀代に下っては国司の赴任があって、中央集権の体制内に組み込まれていくのだが、雨宮凹地に存在し、將軍塚古墳を築きあげた農業集団の末裔は数世紀後の律令体制中に見出し得ないものなのかということである。具体的には律令時代の郷名——埴科郡7郷中のどの郷と結ばれるのかということで、これができれば、微弱ながらも一つの例証にはなるだろう。

7世紀代から始まる地方制度の筋は国一郡一里一戸であり、霊龜元(715)年から天平12(740)年までの25年間は国一郡一郷一里一戸。それ以後は国一郡一郷一戸となった。このうち、国・郡には境界があるも、郷・里は地域によらず郷(里)を構成する戸に基準をおいているため、四至は判然としていない。郡の増置の時は従来の郡を分置して一郡を建てているのに、郷の場合は分置といわず新たに加うという次第で、埴科郡7郷の地域を地図上にグルーピングすることはでき得ない。

ただ、天平12年以後の制度は永く存続し、平安末に至ると郷が国衙領の一定の地域を表現するようになるので、そこから溯っての地域の推測はある程度可能である。

地名の上から坂城・磯部・船山・英多は雨宮凹地よりはずされるので、倉科・屋代・大穴の3郷がここでは問題となる。うち、倉科は昭和31年に屋代町に合併するまで村名として存続してきているので問題は少ない。

倉科郷は中世、倉科庄に替っている。『吾妻鏡』文治2年3月乃貢未済庄々注文(寛永本)に「九条城興寺領倉科庄」と見えるのがそれだが、ここで興味深いのは、これに続く「同加納屋代四ヶ村」の条で、これにより屋代郷の位置も推定できる。

「同」は倉科庄に同じの意。「加納」は「地理的条件の有利なるを楯として自領庄の外に官地を冒して賦税を加納し漸次領知権の凡てを収むること」⁽⁴⁾なので、屋代四ヶ村は倉科庄と同一の地理条件をもつ地域ということになる。

明治8年の調べによると、倉科村の水田面積は11町3反、森村は77町3反で、この用水である三滝川と沢山川は旧生萱村の宮崎あたりで合し(以後生仁川)、北流して千曲川に注いでいる。したがって、屋代四ヶ村は用水を同じくする旧生萱・雨宮・土口・屋代村あたりが該当する。このうち、雨宮村には貞観8(866)年に定額寺となった屋代寺に比定できる廃寺跡があり、近接する灰塚遺跡からは「卍」の墨書土器片が出土している。

更に、屋代が社に通ずるとするならば、ここには「雨宮座日吉神社」が祀られている。

4

明治7年から17年にかけて作成された『長野県町村誌』⁽⁵⁾によれば、雨宮村・土口村・生萱村・森村は古時大穴郷と称するとあるが、中世の郷中に名を留めていないのが大穴郷である。『吾妻鏡』文治2年2月条には「大穴庄」の名が見えるが、配列の順序によれば安曇郡所在で、池田町の大部分と明科町陸郷にかけての地域が比定されている。『信濃地名考』は「森村、土口村2村のうちなるべし」、『大日本地名辞書』は「西条村・清野村・豊栄村等にあたるごとし」、『日本地理志料』は「土口・雨宮・岩野の諸邑に互る」と見える。

下って、栗岩英治氏は「大穴、是は森村の地字オホナである。而して是が昔の郷の名残りらし」⁽⁶⁾。一志茂樹氏は「更埴市域の旧屋代町の大部分と旧雨宮県村の一部」、⁽⁷⁾なお、同氏は「倉科郷は旧倉科・旧森両村地域、屋代郷は旧雨宮県村の大半地域」。米山一政氏は「生仁は「オオナ」の轉訛では⁽⁸⁾ないかと想像される。「雨宮の沢山川以東、生仁・生萱・土口を含む地域」。関連して「屋代郷は屋代町東北の千曲川自然堤防上、その東端は屋代寺の寺跡まで。倉科は今の倉科地区から森地区へかけて」。

「大穴」は「於保奈」と訓じられている。地名に当ると森地区に「おほら」があるが、その他に、森と屋代の境にある山名に「大穴山」がある。「おほら」はこの山の東麓に位置する村名だが、注意しなければならぬのは、この山頂に森將軍塚古墳が築かれていることで、同古墳の所在地は「更埴市森字大穴山・赤池山」である。

全面葺石貼りになる主軸長100mの前方後円墳の、巨大な竪穴式石室中に眠る首長は、雨宮凹地外の農民にまで君臨していたことだろうが、核となる村は凹地内になければならない。しかも村の規模は相当に大きくなければならぬので、大穴山の山麓下に求めることはできかねる。古墳の全貌を真正面に見る地域こそ核的な村にふさわしい訳で、古墳真北の、1500mへだたった千曲川自然堤防があがってくる。この自然堤防上は4世紀代からの集落遺跡で覆われてしまっている。

5

前節では相当に飛躍してしまったが、底辺を北に置いた三角形の雨宮凹地の東麓際に倉科郷、北辺に横たわる自然堤防のうち、西半分は大穴郷、東半分に屋代郷を設定し、大穴郷と森將軍塚古墳とを結びつけた。

籍帳制度は、それが収奪を目的としている以上、当時の現実にある程度則していなければならないだろう。利害を同じくする自然村落を統合して1郷を形成することはあっても、逆のケースは考え難い。自然堤防上に設けた2郷の郷名については、西方部に大穴郷を置こうとする一志氏及び桐原の説、東方に置く『信濃地名考』、『日本地理志料』、『長野県町村誌』、米山一政氏の説と対立してはいるが、雨宮凹地に存した3つの郷の位置同定作業はまずは妥当視されることだろう。ところで、『倭名鈔』の郷名と、奈良・平安時代の文書記載の郷名との照合結果では、9世紀前半が97.5%と最も高く、8世紀前半まで溯ぼらせると84.5%と低下してしまっている。この地縁組織をそれ以前の世紀まで及ぼすことには問題がある。しかし、古代の村落には意外と停滞的な面がある。4・5世紀代においても雨宮凹地内の自然村落は3群にグルーピングできないものか。そして、大穴郷は森將軍塚、倉科郷は倉科將軍塚、屋代郷は土口將軍塚古墳築造村落の末裔といった図式が描けはしないかというこ

とである。

6

千曲川流域という地形上から、善光寺平南半部には弥生時代遺跡は豊富であるとの先入観念を持っていたが、更埴市教育委員会の矢島宏雄氏の示教によると、更級郡下では豊富であるも埴科郡下は寡少に過ぎるとのことである。宮下健司氏も「更級郡下の石川条里地域には伊勢宮・松節遺跡を始め数多い遺跡があるのに、埴科郡下の後者は広大な条里地割であるが、弥生時代のものでは生仁遺跡の他はその規模は小さく、歴史景観も少ない⁽⁹⁾」と両地域間の差異を強調している。

だが、次期に入った途端、埴科郡の雨宮凹地には善光寺平最古の古墳が築かれ、自然堤防上に城の内の大集落が出現する。この現象は余りにも唐突で、内よりの変革よりも外からの影響を大きく考えたい。大和政権が信濃に進出するに当たり、在地勢力の稀薄な地域を狙って、更級郡下よりも埴科の雨宮凹地に橋頭堡を築きあげたとする考えがどうしても払拭しきれない。在地勢力との結合は当然にあっただろうが、彼等とは生活習慣を異にする人人の来住も結構多かった。4世紀後半の朝鮮進攻による渡来人も混っていたのかもしれない。

自然堤防上に定着した彼等は後背湿地の開拓を進める。自然堤防の南側には現在五十里川が流れているが、古代に同川は存在しなかったとする考察があるので、まず用水路・排水路の開鑿は必要である。これには畿内人・渡来人のもつ技術が発揮された。彼等の首長は集落の真南の山頂に葬られた。そして古墳の墳麓には8基の円墳、61基にのぼる組合式箱形石棺、11基の埴輪棺が築かれた。時期的に最も下るものが6世紀後半の円墳で、横穴式石室を内蔵している。

一方、5世紀代に入って、三滝川東の山頂には倉科將軍塚古墳が築かれ、山麓には横穴式石室をもつ円墳3基、更に、三滝川の発する奥処に矢の口と杉山の群集墳が築かれている。矢の口古墳群は13基、杉山古墳群は22基で、これは総て積石円墳である。

また、三滝・沢山川の合する生萱地区の山麓、及び土口の北の薬師山山麓には横穴式石室内蔵の円墳が数多く存在している。生萱地区に現存する古墳は僅か3基にすぎないが、明治初年には將軍塚・大穴塚・老の塚・飯盛塚・御蔵塚・遠見塚・皇塚の7塚があり、更にそれ以前に遡っては30余基の古墳があった。土口地区の現存古墳は17基だが、これも『長野県町村誌』の記事によれば、薬師山の半腹より裾にかけて「坑口相連りてその数往日は百余あり（或いは47ヶともいう）」と見える。

いかがであろう。3地区の古墳様相に見られたこの差異は大きい。殊に、倉科將軍塚古墳とさして時間差がない同じ5世紀に、雨宮凹地の北東隅を劃する薬師山山頂に前方後円墳を築き、次期、薬師山南麓に100余基もの横穴式石室墳を構築した氏族は、明らかに森將軍塚古墳や倉科將軍塚古墳築造氏族とは性格を異にしている。

土口の水田面積は、明治8年には僅か8町5反、畑は33町9反、集落のすぐ西側は千曲川の河筋で、増水の都度、河水は逆流してくる。沢山川（生仁川）を渡り、謡坂を越えての土口の凹地は、西方の自然堤防上集落から見た場合、高井郡南端の大室谷同様の、死者の眠る地域であったのかもしれない。

同じ千曲川自然堤防上に生活を構えてはいても、祖霊の鎮まる森將軍塚古墳の墳麓に眠ることを願ったグループとは性格は大いに異なる。少なくとも6世紀代にあってはそうだった。森將軍塚古墳と土口將軍塚古墳の被葬者間にほぼ1世紀の時間差がある。5世紀後半。この凹地において新氏族の台頭のあったことが思われる。

考古学的資料の裏付けは全く無いといってよいが雨宮凹地の中より土口將軍塚古墳を觀て、改めて、岩崎氏の第4説にひかれるものがある。(桐原 健)

註

- (1) 斎藤忠「国造に関する考古学上の一試論」『古墳とその時代(2)』昭33年
- (2) 岩崎卓也「古墳時代の遺跡・遺物と郷土社会の変貌」『郷土史研究と考古学』昭45年
- (3) 更埴市教育委員会『森將軍塚古墳——保存整備事業第1年～第5年発掘調査概報』昭56～60年。
- (4) 市村咸人『建武中興を中心としたる信濃勤王史攷下巻』昭14年
- (5) 長野県『長野県町村誌』昭11年
- (6) 栗岩英治「郷名考」『諏訪研究』大6年
- (7) 一志茂樹「周辺の環境的考察——歴史的環境」『更埴市条里遺構調査報告書』昭42年
- (8) 米山一政「古代——律令制時代」『更級埴科地方誌第2巻』昭53年
- (9) 宮下健司「条里地域の歴史景観」長野郷土史研究会総会発表、昭61年1月



図49 土口將軍塚古墳周辺の遺跡分布

- 1 土口將軍塚古墳 2 倉科將軍塚古墳 3 森將軍塚古墳 4 有明山將軍塚古墳 5 中郷神社古墳
 6 川柳將軍塚古墳 7 姫塚古墳
 I 土口古墳群 II 生萱古墳群 III 大峽古墳群 IV 矢ノ口古墳群 V 杉山古墳群 VI 森古墳群
 A 城の内遺跡 B 下条遺跡 C 灰塚遺跡 D 推定屋代寺跡 E 生仁遺跡 F 馬口遺跡